

二〇二二年二月一日

御座舟を浮かべ嵐峽小六月
耳遠く身ぶり手ぶりや日向ぼこ
甘酒を双手包みにいただきぬ
落柿舎に虚子の一碑や紅葉影
師走寺瓦寄進に名を記す
散歩する主も犬も息白し
全身に陽光纏ひ銀杏散る

二〇二二年二月三〇日

庭園の石の温みや紅葉晴
堰落つる水の小春や大堰川
石仏の裳裾嵩なす散紅葉
竹林の続く道の辺石路明かり
吟行の冷えにこぞつて葱うどん
落柿舎の投句箱へと紅葉散る
禅林を要としたる枯野かな

二〇二二年二月二十九日

水脈あるやなしやに進む紅葉舟
橋半ば錦秋の溪パノラマに
落柿舎に蓑笠古りて冬ざるる
錦秋を綴り山並昏れなんと

二〇二二年二月二八日

冬ざるる道はこれより化野へ
ご開扉の吉祥天に小春の日
俳句本とりどり販ぐ紅葉寺
つやつやと尻を並べて柿届く

菜々

宏虎

さつき

有香

きづな

宏虎

とろうち

なつき

菜々

よし子

せいじ

ひかり

満天

せいじ

とろうち

あさこ

はく子

よし子

菜々

うつぎ

きづな

とろうち

現し世の話題沸々鍋に酌む

苔庭を覆ひ尽くして散紅葉

溪風に高舞ふもあり紅葉散る

二〇二二年二月二七日

駈けてゆく音のかそけき風落葉

月冴えて一朵の雲も寄せ付けず

開運の鐘に行列紅葉寺

腹巻きの子安地藏や堂ぬくし

大銀杏散りて天辺展けけり

鳩連鎖反応して潜る

二〇二二年二月二六日

山褰の深きに迷ふ狭霧かな

冬霧を纏ぎて暮るる峽の里

夕づきし築地にのこる石路あかり

突風に修羅場と化しぬ散紅葉

苔庭の紅葉に心洗ひけり

御座船に紅葉かつ散る高瀬川

飛火野を巡る道の辺冬紅葉

常盤木の根方にも敷く散紅葉

二〇二二年二月二五日

険磴に杖を恃みて紅葉狩

冬晴に津軽三味線音高かし

な滑りそ分け入る柚の落葉みち

観音の後ろは奈落谿紅葉

三刀

わかば

よし子

ともえ

菜々

なつき

有香

つくし

さつき

せいじ

有香

ひかり

三刀

さつき

せいじ

百合

きづな

なつき

満天

雅流

よし女

毎日句会みのる選・二〇二二年二月四日